第11回東京大学ホームカミングデイ
11th THE UNIVERSITY OF TOKYO HOMECOMING DAY

東京大学地震研究所

～幕末から近代地震学の黎明期～

地震研究所創立へ

地震研究所では、『第 11 回東京大学ホームカミングデイ』において図書室所蔵資料をもとに、地震と共に歩んだ幕末から近代地震学の黎明期（地震研究所創立まで）をご紹介いたします。また、展示を通して各資料の重要性と今後の保存について考えます。

日時：2012 年 10 月 20 日（土）　11：00～14：00
場所：東京大学地震研究所 1 号館　2 階ラウンジ

明治 13 年(1880 年)2 月 22 日 0 時 50 分頃横浜強震。文部省所管の官立学校として東京大学が創設されて間もない当時、明治新政府は欧米の科学技術の急速な輸入を目指し、外国から多くの科学技術者を招いて学生の教育にあたらせていた。いわゆる「御雇外国人教師」である。この横浜強震はマグネチュード 5.5～6.0 とされており、特別に大きなものではなかったが、好奇心旺盛な若き御雇外国人教師 John Milne(ジョン・ミルン)の心を大きく揺さぶった。地震学の幕開けである。

その後、明治 24 年(1891 年)10 月 28 日 6 時 38 分濃尾地震が日本人による地震学の始まり「震災予防調査会」の設立、大正 12 年(1923 年)11 月 1 日 11 時 58 分関東大地震が専任の研究者を擁する「地震研究所」の創立へとそれぞれ繋がっていった。

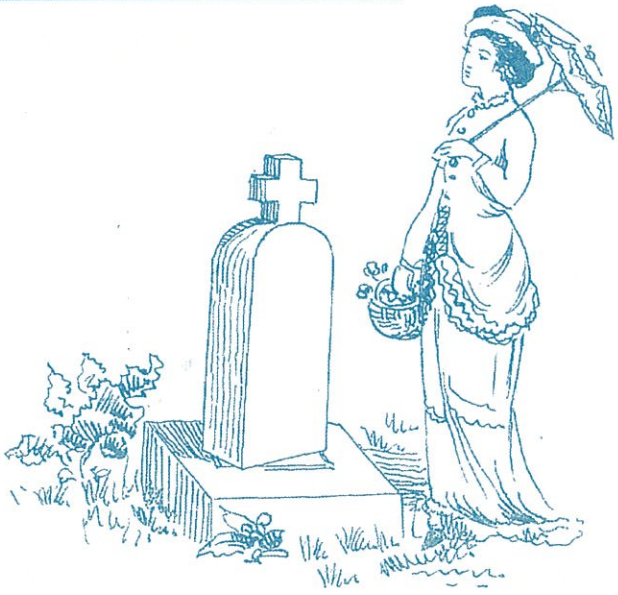

Fig 2. FOREIGN TOMB-STONES YOKOHAMA, JAPAN.

横浜強震による横浜外国人墓地の墓石の回転。

ミルンによるスケッチ。立つ人はめぐり会ってその後結婚するミルン夫人。

Transactions of the Seismological Society of Japan. 1880, Vol.1 Part II Fig2